

組織へのこだわり

—『今昔物語集』標題考—

宮 田 尚

1

卷六第1話「震旦秦始皇時天竺僧渡語」は、当初の計画では巻十に収められるはずであった。それが編集のすすむなかで変更され、巻六に移されたのであった。この間の事情については、別稿でふれた。^(注1)

六1の、いわゆる天竺僧渡来譚が巻十に収められようとしていたことは、十一（鈴鹿本）に残されているつぎの本文標題によつてたしかめられる。

秦始皇時從天竺渡利房語

十一は、秦の建国と滅亡とをその内容とする。本文標題にみられるような、天竺渡りの僧は登場しない。とうぜん、僧の名を利房とする部分もない。右の本文標題は、十一の内容とまったく重なりあうところがないのである。

十一の本文標題のさし示すところは、六1の本文内容と合致する。六1の標題には利房の名はかけられていないが、はなしそのものは利房に焦点があわせられている。十一の本文標題が、本来、

組織へのこだわり —『今昔物語集』標題考—

六1所載のはなしに冠せられていたことは疑いを入れない。

十一は、はなしをさしかえるに際して、不用意にも、本文標題だけは訂正をぬかつて、元のものを残してしまったのだ。

はなしの移動の方向をその逆だとする考え方、すなわち、巻六から巻4へ移行させるための第一段階として、本文標題だけをまず巻十に移したのだとする解釈は、天竺僧渡来譚（利房渡来譚）の内容からしてなりたない。十一は、これも別稿で指摘したところだが、始皇の為政にかかわるはなしを必要とする立場にある。現行十一の内容とて、かならずしも編者の期待するところを十分にそなえているとはいえないけれど、少なくとも、利房渡来譚のばあいよりも優位にあることはたしかだ。優位な条件をそなえたものを、劣者にとつてかえることはありえない。

さて、利房渡来譚が巻十から巻六に移されたとき、本文内容に手が加えられたかどうかはわからない。しかし、標題には修正がこころみられた。巻十では、「從天竺渡利房語」と明示されていた天竺僧の名まえ〈利房〉が削除され、巻六では「天竺僧渡語」と、より一般化されている。

この修正は、『今昔物語集』の標題のありようの一端を、かなり端的に示しているとみてよい。

利房渡来譚のばあいと同じように、いったん収録がきめられていた巻から、他の巻に配置がえをされたことの確認できるはなしがほかに二話ある。四三と四三二とである。これらも巻十から移籍されたものであった。この二話のうち、四三は六一のばあいとは逆で、巻十では〈医師〉と普通名詞で表現してある部分があるが、あらたに配属された巻四では〈善婆〉と、個有名詞におきかえられている。

個有名詞から普通名詞に手なおされた六一と、逆に、普通名詞から個有名詞に変更された四三と、修正のされ方は現象としては違ふ。しかし、これらの改変の根は同じところから発しているようだ。

2

利房渡来譚が巻十から巻六に移されたとき、なぜ利房、渡来譚から天竺僧、渡来譚に変えられたのか。いいかえれば、なぜ十一では利房渡来譚でありえたものが、六一では許容されなかったのか。

結論的にいえば、それはひとえに、十一と六一との、『今昔物語集』のなかにおける立場の相違によつてゐる。

巻十は、〈国史〉と銘うった巻の冒頭をかざるにふさわしく、皇帝にかかわるはなしが時代を追うて配列してある。第2話に高祖が配されているところからみても、第1話は始皇に関するはなしでなければならなかった。それも、なろうことなら始皇を主人公とする、彼の為政に関するものであることが望ましい。しかし、期待ど

おりのはなしが見つからない。とすれば、どこかで妥協するほかない。このばあい、ゆずれないのは始皇に関するはなしである点である。第一次案で収録が予定されていた利房渡来譚は、そうした事情で採用がきまつたものであろう。

十一に収められるはずであった利房渡来譚の内容は、本文が残っていないから六一から推測するほかないが、そこでは始皇は、いわば狂言まわしの役をはたしているにすぎない。前半部には、天竺から聖教をたずさえて渡来した利房らの一行を、始皇が尋問した後、投獄するまでのくだりが語られている。ここまでなら、始皇の為政の一環とみなしうる。しかし、このはなしの興味の中心は、後半の投獄された利房らの一行が、祈念することによつて虚空にあらわれた丈六の釈迦如来の助けをえ、始皇による、いわゆる王難をのがれた点にある。より適切な資料が入手されれば、ただちに排除されるべき内容なのだ。

妥協の結果としての利房渡来譚である。この段階では、「秦始皇時」が最関心事だったのだ。「従天竺渡利房語」の部分は、さしてもんだいにもならなかったにちがいない。また、利房の名まえがあつても、始皇譚としての十一の妨げにはならないとの判断もあつたろう。

ところが六一になると、事情が違つてくる。利房の名まえは不必要なばかりでなく、邪魔なのだ。

巻六は、仏教の伝来を構想の基軸にすえている。六一には、始皇に関するはなしであることに加えて、仏教伝来に関するはなしでもなければならぬという、選択の余地の少ない、きびしい条件が付

与されている。その意味で、ふたつの条件を兼ねそなえた利房渡来譚は、六1にとってかけがえのない資料であった。

ただ利房渡来譚は、より正確にいえば、仏教渡来譚というより、仏教渡来失、敗譚である。利房の名まえを出せば、その失敗譚ないし、不成功譚としての側面が浮びあがってくる。本文では避けられないとしても、少なくとも標題では仏教伝来譚のかたちを確保したい、となると利房の名まえは消去せざるをえない。

じつさい、六1に必要なのは、だれが天竺から来たかということではなくて、僧が来たという事実なのである。そのことは、つづく六2の標題が「仏法渡語」となっていることからあきらかである。

六2は、後漢の明帝のとき、摩騰迦・竺法兰の二人が、仏舍利と正教とをたずさえて渡来し、仏法の受入れに反対する五岳の道士らと争ったうえで、震旦への定着に成功するはなしである。ここで興味のは、天竺僧と五岳の道士たちとの、いわば宗教戦争のさまにあるのだが、標題はそうした具体的なこともにはいっさいふれず、人名さえも無視して、ただ、「後漢明帝時仏法渡語」とする。始皇の弾圧によって震旦に定着することはかなわなかったけれども、利房らの一行もまた、「法文・聖教」をたずさえて渡来している。〈渡語〉というかぎりにおいて、第1話は第2話と同種同類のはなしであるはずなのだが、編者は第1話を「僧」とし、第2話を「仏法」と区別している。

六1に編者がなにを期待しているのか、その意図は明白である。標題もとうぜん、その方向で決定されているとみななければならぬ。

組織へのこだわり — 『今昔物語集』 標題考 —

六1の類話が「打聞集」と「宇治拾遺物語」とにある。前者は「尺迦如来験事」と、後半部をふまえた標題を付しており、後者は「秦始皇天竺より来僧祭獄の事」と、前半部をふまえた標題を付している。「打聞集」にせよ「宇治拾遺物語」にせよ、本文内容とからみかからいえば、標題としての許容範囲にあるとみてよい。しかし六1の標題は、あくまでも「天竺僧渡語」でなければならなかったのだ。

ここにあるのは、ひとえに組織の論理である。標題は、個々のはなしの顔であるだけではない。それもまた『今昔物語集』の組織に、きっちり組み込まれているのである。

3

『今昔物語集』の標題が組織の論理に裏打ちされたものであることは、各巻に散見する本文内容と齟齬する標題の付されている例からうかがうことができる。齟齬の成因には、十1に取り残された本文標題にみられるような、不用意さ、あるいは未成熟さによる不作業のものもある。だが、おおくは作意にもとづいている。作意は、本文内容への奉仕よりも、組織への忠誠を重んずるところから発している。これらの点についてもすでに別稿で指摘したところだが、震旦部から二・三の例をあげて再説しておきたい。

たとえば、六18「震旦并州張元寿造弥陀像生極樂語」のばあい、標題からすればとうぜん、弥陀の像を作った張元寿が、その功德によって極樂に生まれることが出来たという内容が推想されるはずである。元寿以外の人物が弥陀の像を作ったと解する余地も、極樂往

生をしたのが元寿以外の人物だと解する余地も、この標題にはまったくない。

しかし、じつは、弥陀の像を作ったのは元寿だが、極樂往生をしたのは彼ではない。元寿の両親なのである。元寿が弥陀の像を作ったのも、両親の後世を救わがためなのであった。

このはなしの出典である。「三宝感應要略録」上14も、この点ははっきりしていて、「并州張元寿為亡親造阿弥陀像感應」との標題をかかっている。〈為亡親〉は、発願の契機であると同時に、救われるものがだれかを示す、本話のもっとも重要な眼目である。

にもかかわらず、六八はその〈為亡親〉に相当する部分を欠いている。なぜなのだろうか。これは、不用意さによるものなのであろうか。あるいは、読みすすんでいってはおじめて、救われるのが元寿本人ではなく、彼の両親であったことに気付かせる意外性の効果をもくろんだ、意図的な措置なのだろうか。

いずれでもない。これはひとえに、前話との標題の形式を統一した組織の論理より発しているのだ。六八の標題は「震旦開覺寺道暉造弥陀像生極樂語」。個有名詞の部分が違うだけで、形式は六八と完全に一致する。

六八の標題にも、多少の無理がある。

標題からすれば六八も、弥陀の像を作った道暉が、その功德によつて極樂往生を果したとの内容が予想されるはずである。たしかに道暉は極樂往生をしていて、六八の元寿のばあいとは違う。しかし道暉の極樂往生は、弥陀像を作ったことと直結するものではない。

道暉はまず、栴檀をもつて三寸の弥陀像を作った功德により、死後七日めに蘇生する。生き返つてからの道暉は、死んでいた間にえた弥陀の告示にしたがつて、香湯をもつて沐浴し、懺悔をし、さらには周囲の人々に対して念仏を修するようはたらきかけた後、ふたたび死ぬ。造像は極樂往生のひとつの因ではあるが、蘇生してからの、弥陀の告示にしたがつた當為がなければ極樂往生は不能であり、単なる蘇生譚にとどまる。つまり六八でも、極樂往生へのもつとも肝要な部分が標題から欠落しているのである。

七三「為救馬寫法花經免難人語」は、奇妙な標題だ。馬を救うために法花經を寫したのはよいとして、そのことによつて馬が救われたのではなく、寫經をした人が難をまぬがれたというのである。

奇妙なのは、しかも、それだけではない。本文中には、馬を救わんとして法花經の寫寫をした場面もなければ、寫經によつて難をまぬかれた人も登場しない。標題と本文内容との懸隔は、はなはだしいといわざるをえない。

本話の主人公は死に臨んで、死後の用に供するために、従者と馬とを殺すよう家人に求める。家人は従者をまず殺す。しかし四日後に、従者は蘇る。蘇えった従者は、冥界での主人の責苦の状況を報告し、読經の声が聞えて少し楽になったものの、まだ責苦は続いているから、法花經の寫寫と造仏とをして難を救つてほしいとの伝言を伝える。

「家ノ人、此ノ事ヲ聞テ、弥ヨ信ヲ発シテ、其ノ日ヲ以テ齋會ヲ設ク。家ノ財物ヲ傾ケテ、功德ヲ修シ、門ヲ合セテ專ニ善根ヲ勞ミケリトナム語り伝ヘタルトヤ」

と結ばれるところよりすれば、主人公の要求どおりに家人は写経をし、造仏をして、その結果、彼の苦は救われたであろうと察せられる仕組みにはなっている。しかし、それはあくまでもはなしの外のこと。はなしの中で難をまぬかれてはいない。あえて近似した場面をあげるとすれば、読経によって責苦が軽減された部分ということになる。

一方、馬は、主人から殺すよう求められはしたけれど、けっきょく殺さずじまいに終っている。本文にも「馬ヲバ未ダ不殺ズ」とある。したがって、馬の苦を救う必要はないし、そのための写経をする必要なども、まったくくない。写経を意味するかとみられる部分は、右にあげたように本文中に求められはするが、それはあくまでも主人の苦を救うためなのであって、馬の苦を救うためではない。

こうした、本文内容といかにもかけはなれた標題が、にもかかわらず、なぜ付されているのかについての説明は、次話との関連をおいてはつけられない。

七32には、つぎのような標題がつけられている。「清齋寺玄渚為救道明写花経語」

七32の標題は、本文内容と合致する。ここでは玄渚が、さきに死んだ同門の道明と偶然会い、道明が責苦を受けていることを知るにおよんで写経をする。その結果、道明は救われたのであった。標題の〈為救〉は、完全に機能している。

九34「震旦刑部侍郎宗行眞途語」も、標題と本文内容とに齟齬がある。

このはなしの主人公は、王瑋という人物である。王瑋は眞途に召

されたものの、無実であることを主張し、許されて蘇生する。標題にかかげられている宗行眞は、冥界から沙婆に帰る途中の王瑋を呼びとめて、責苦からのがれる手だてを講じてほしいと要望する役割をはたしているにすぎない。

そうした端役の行質が、にもかかわらず標題にかかげられているのは、前話の主人公傳奕との関連による。九33の標題はつぎのとおり。「震旦大史令傳奕行眞途語」

行質、傳奕は、ともにへ心三仏法ヲ不信ぬ官僚である。それゆえに彼らは、冥途から帰ることが許されない。九34で、事実上の主人公である王瑋を標題にかかげると、なれば必然的に蘇生譚になってしまう。巻九において蘇生譚は、第32話までで終わっている。ここは〈行眞途〉でなければならなかったのだ。

六18にみるような、救われる人物の標題からの削除。七31にみるような、救いの対象でない馬の、救いの対象としての標題への添加。そして九34にみるような、本来主人公でありえないものの標題への掲揚。これらはいずれも、組織の論理が優先された措置にはかならない。

4

標題と本文内容との齟齬の成因は、おおむね標題の側にあるようだ。標題の、本文はなれ現象である。

逆の例もある。本文の、標題はなれである。このばあいにも、標題における組織の論理は生きている。六16「震旦安楽寺恵海畫弥陀像生極楽語」についてみよう。

六16は標題からすれば、弥陀の像を描いた恵海が、その功德によつて極樂往生をとげたはなしだということになる。それ以外の解釈の出る余地はない。

じじつ、六16話の前後は、いずれも〈造弥陀像生極樂語〉である。六16は、〈畫弥陀像〉があるからこそ、この位置に存在しうるので。ところが本文中には、恵海が弥陀の画像を描いたとの記事はない。六16に登場する弥陀の画像は、済州の僧道領が恵海のもとに持つて来た一幅のみであり、その画像は道領の説明するところによれば、天竺の鶏頭摩寺の五体の菩薩が神通力で極樂世界に行き、弥陀を見て図繪したものだといふ。恵海はその画像を礼拝しつゝ、ある暁方に死んだのであつた。

もし六16の本文内容が本来のかたちであつたとするならば、六16に配置するために、標題にだけ〈畫弥陀像〉を挿入したものとみなければならぬ。しかし、この標題と本文内容との齟齬の成因は、標題の側ではなく、本文の側にある。そのことは、『三宝感応要略録』上とをつきあわせることによつてたしかめられる。

『要略録』上12は、「随安樂寺釈恵海図尊無量壽像感応」との標題をそなえており、恵海が弥陀像を描いたことが明示してある。標題だけではない。本文中にも、そのことは示されている。道領（『要略録』では「道銘」）のもたらした画像にいたく感動した恵海は、それを模写して、極樂往生をひたすら願う。当該部分はずきのとおり。

深懷禮懺。乃觀神光焰燦。度所希幸。於是模寫離苦。願生彼土。沒齒為念。

六16は、「要略録」上12にほぼ忠実にしたがつていながら、もつともかんじんな——線部分を欠いている。当該部分はずきのとおり。

即チ、仏ノ像ヲ見奉ルニ、正ヲ光リ耀キ給フ。恵海、希有ノ思ヒヲ成シテ、即チ、此ノ極樂世界ニ生レム事ヲ願フ。

六16が〈模写〉云々の記文を欠いている理由は、いくつか考えられる。たとえば、この部分の欠落した『要略録』に依拠した可能性も、そのひとつ。いったん成立した後、清書あるいは転写の過程で脱落した可能性も、そのひとつである。

しかし、これはおそらく、成立前や成立後に因を求めるよりも、本文策定時に求めるのが相当であろう。意図的なものであるかどうかはともかく、本文策定時に、〈模写〉云々の記文は消去されたもののようにみえる。ひとことではいへば、それは意識のゆれにもとづく。

『要略録』上12のように、道領の持つて来た弥陀の画像に感銘を受け、これを模写して極樂往生を願つたとするよりも、六16のばあいのように、道領の持つて来た画像、すなわち、弥陀を笑見して描いたという画像への感動が、恵海の極樂往生への願望を刺戟したとする方が、極樂往生に視点をすえるとき、直接的で、はるかに印象が強烈である。

本文策定時の編者の意識は、おそらく〈生極樂〉に傾いていたのだ。それが結果として、〈模写〉云々の記文を消去させたのであろう。〈生極樂〉の因は、本来〈畫弥陀像〉であつたはずなのだが、ここではもつぱら、画像へのひたむきな礼拝ということになる。

とまれ、〈模写〉と同義語である標題の〈叢弥陀像〉は、本文から直接割り出されたものではない。

標題は、もともと、はなしそのものから抽出されたものであるはずであるが、『今昔物語集』という枠のなかでは、逆に本文に先行している。六16の事例は、そうした事実を物語るものである。

5

標題は本文に先行し、本文を方向づける。さまざまな解釈の可能な本文への、解釈の一元化をはかる機能をもつ。一元化はとうぜん、組織体としての『今昔物語集』の、あるべき姿を集約する方向へむかつてすめられる。天竺部も震旦部も、そして本朝部も、この点に変わりはない。

四13「天竺人海中値悪龍人依比丘教免害語」についてみよう。これは、多様な解釈の可能なはなしである。

四13には、三人の人物と一頭の龍とが登場する。三人の人物とは、海を渡って交易をする商人、道中の安全をはかるために商人の連れている比丘、それに船頭である。龍をふくめて、彼らは、いずれも四13の主人公となりうる条件をそなえている。

現象的に、もつとも活躍するのは船頭である。彼は、優婆塞に変わった龍王が、同船している比丘への怒みをはらすために悪風を起したことを知ると、龍王を説得する一方で、比丘に経を読ませる。その結果、比丘をふくむ船中の人々は事なきをえ、龍王もまた蛇身をはなれて天上に生れることが出来たのであった。

船頭がオモテの主役だとすれば、比丘はウラの主役である。彼

組織へのこだわり——『今昔物語集』標題考——

は、前生、人間であった当時の龍王の供養を受けながら、それに報いなかっただけに怨を買ひ、あわや殺されようとするとき、船頭のとりにしで読経をし、龍王を天上に転じさせる。はなしの表面にこそあまり出ないが、発端から結末まで、比丘を中心にして事件は展開している。

よりひどい責苦を受けることになるかどうかのわきまえもなく、怨みをはらすために、しやにむに比丘を殺そうとするものの、船頭のいさめに耳を傾けて読経を聞き、天上に生れることの出来た龍王もまた、転生譚の主人公たる資格をそなえているといつてよいだろう。

主人公と主題とは、連動している。両者は不可分の関係にある。主人公をおきかえることによって、主題を読みかえたかっこうの例として、二四56「播磨国郡司家女説和歌語」と、二五7「藤原保昌朝臣値盗人袴垂語」とをあげておこう。

この二話とともに「宇治拾遺物語」に類話があり、前者には「播磨守為家侍さたの事」（93話）、後者には「袴垂合保昌事」（28話）との標題が、それぞれ付けられている。93話の主人公は〈さた〉であり、28話の主人公は〈袴垂〉であると、標題に示されているわけである。

標題に示されている両話の主人公は、本文の趣旨とも一致する。両話の冒頭は、それぞれつぎのとおり。

○今は昔、播磨の守為家という人あり。それが内に、させることもなき侍あり。あざなきたとなんいひけるを、例の名をば呼はずして、主も、傍輩も、ただ、「さた」とのみ呼びける。（93話）

○昔、袴垂とて、いみじき盗人の大将軍ありけり。(28話)

冒頭に主人公を提示するのは物語の伝統的な方法である。説話集においても、この方法は継承されている。(両話は「宇治拾遺物語」にみるかたちが本来のものであったはずなのである。)

ところが「今昔物語集」は、冒頭ではいずれも「宇治拾遺物語」と同じかたちをとりながら、標題では「郡司家女」(二四56)と、「藤原保昌」(二二五7)とを、それぞれ主人公としてかかっている。

これはほかでもない。巻二四に収めるためには、歌を詠んだ「郡司家女」が主人公でなければならなかったし、巻二五に収めるためには、豪胆な「藤原保昌」でなければならなかったのだ。「宇治拾遺物語」のように「さた」を主人公だとすれば、彼の無知を笑うはなしとなり、巻二八に収めなければならぬし、盗人の大将軍の「袴垂」が主人公なら、巻二九に収めなければならぬという事情も、もちろんある。しかし、より重要なのは前話との関連である。

二四55が「大隅国郡司、詠和歌語」である以上、その次に配するはなしは、郡司のからむ歌に関するものであることが望ましい。二四56は、そうした要請から採択されたものなのだ。同じように二五7も、前話「春宮大進源頼光朝臣射狐語」の、守護神の助けによって超人的な弓の業のさえをみせた部分との関連において、鬼神に守られたかのごとき不可思議な迫力をそなえた「藤原保昌」が選定されたのだ。ただし、ここでは、前話とのあいだで標題の調整はおこなわれていない。

要するに、標題にみられる主人公の変更は、両話を、巻二四と巻二五とに、それぞれ収録するための方便だったのだ。

ひるがえって、四13のばあいはどうか。

右にいうように、船頭も、比丘も、そして龍王も、主人公たりうる条件をそなえている。しかし、標題にかかげられているのは、そのいずれでもない。主人公は「於海中値悪龍人」。つまり、道中の安全のために比丘をともなっている交易商人なのである。

なお、本文標題冒頭の「天竺人」は、「於海中値悪龍人」と同一人物をさす。したがって、これは目録標題のように、ない方がすつきりする。同様の例は四20にもある。ここでも、「天竺人」は、主人公である「為国王被召妻人」と同一人物をさす。

さて、四13に登場する人物のうちで、もっとも影のうすい商人をあえて主人公にすえるのは、くりかえすことになるけれども、組織の論理にほかならない。ここでは前話との関連において、「比丘教」が必要だったのだ。

「比丘教」を機能させようとするとき、さしあたり考えられるのは、龍王が救われたとする方法と、船中の人々が救われたとする方法とであろう。しかし、龍王では転生譚となつて、この位置にふさわしくない。前話との関連からすれば、現世での、難をまぬがれたはなしが適当である。となると、船中の人々が救われたはなしとするほかない。「今昔物語集」は原則として、個人を中心にはなしをまとめるという方向をとるから、このばあいはなれば必然的に、船中の人々を代表する商人を標題にとりあげることになる。「於海中値龍人」がきまっていたいきさつは、およそこうであつたらう。

このはなしにおいて商人を主人公にみだてる方法は、けつして特異ではない。本文の書き出しが、

今昔、天竺ノ人ハ道ヲ行ク時ハ必ス比丘ヲ具ス。守有ガ故也。
とあるところからもそれはいいうるし、名大本「百囚縁集」の標題が、「天竺道行事」であることからも、それはいいうるだろう。
《天竺道行》は、比丘でもなければ、船頭でもない。まして龍王でもない。それらを統括する商人の營為のいいでなければならぬ。

6

標題は、編成上の要請と、個々のはなしへの興味とのせめぎあいのなかで策定される。むろん、両者は、歩み寄り不能の対立状況に常にあるわけではない。しかし、相拮抗するとき、前者は後者に優先する。編成上の要請もまた、編者の興味の対象なのだ。

標題は、つまり、享受者としての、また、提供者としての、編者の読みの表出にはかならない。したがって、標題をふくめてはなしを読む必要がある。そのことをとおして、あらたに見えてくる問題も少なくないはずである。近時の小峯和明氏の試みは、その意味において留意される。

ただ、氏の四13の解釈については、ふたつの点で同意できない。

第一は、四13の標題を、救い、救われる宗教上の本質的な課題をあぶり出すためのからくりだと主張する点。氏は、四13の標題が前話との整合をはかったものと認めつつ、「於海中值悪龍人」について、

話を読み進むにつれ、龍に会った「人」とは比丘その人がむしろふさわしく、害を免れたのも実は比丘その人だったのでは、と読者は思い当る。

組織へのこだわり——「今昔物語集」標題考——

という。

たしかに四13は、さきにふれたように多様な解釈の可能なはなしであり、救い、救われるという解釈もなりたちうる。

しかし、それはあくまでも、素材としての当該話が本来的に内包する多様性によるものなのであって、四13の標題の関知するところではない。標題の「於海中值悪龍人」を比丘だと解することは論理上不可能であるし、読み進むにつれて、じつは比丘だったと読者に気づかせるような、迂遠で、高度な標題を設定するはずもなからう。標題は簡明直截でなければならぬ。気付かない読者を置き去りにすることになるからである。読者を置き去りにしたのは、惹句としての機能も果せない。

第二は、四13の標題を完全なものとしてとらえている点。

『今昔物語集』は未定稿である。標題もなおゆれている。六1の痕跡が十1の本文標題にとどめられていることや、本文標題と目録(注5)標題とのずれが各巻に散在していることから、それはいいうる。

組織の論理で、ついに本文内容との齟齬をかかえこんだまま終る標題もあろうが、未定稿だということは、なお調整される標題も残っていることを意味する。未調整の標題のなかには、不用意さや、表現の未熟さによるものもふくまれている。

四13の標題も、そうしたもののひとつである。

四13の標題のもたらす混乱の最大の因は、前話との関連で「比丘教」を置いたものの、その対象を明確にしないまま放置した点にある。「教」対象が「悪龍」としてあれば、解釈の一元化は達せられ、混乱はおこらなかつたはずである。それが出来なかつたのは、

「於海中値悪龍人」と、主部ですでに悪龍を出してしまつたからにはかならない。この悪龍を、たとえば悪風などと置きかえ、「教」の対象として、述部に龍をもって来れば、編者が標題で意図したところは達成される。だが、「値悪龍」の印象の強烈さが、それを妨げたのだ。

標題の効果を称揚するのはよい。しかし、標題の「絶妙な構造」を指摘するに際して、本文内容とずれのあるものを例として用いるのでは説得力に欠ける。それは、例外的な存在でしかないからである。かりに潜在的なものであるにせよ、編者が標題の効果的な運用をもくろんでいたとすれば、そうしたもののなかだけでなく、むしろ、本文内容と合致するものなかにこそ、「絶妙な構造」は認められなくてはなるまい。

7

個々のはなしだけでなく、標題にまで組織への配慮をさせたものはなになつたのか。なにが編者を、かくも組織化にこだわらせたのか。「今昔物語集」の実態解明への、これは重要な糸口になるはずである。

注1 今昔物語集の編集過程(本誌20号)

今昔物語卷十の構造(本誌21号)

注2 震旦は秦にはじまる(本誌17号)

注3 今昔物語集震旦部の標題について(本誌8号)

今昔物語集の標題について(本誌11号)

注4 今昔物語集の表題と物語(国文学研究・92集)

注5 今昔物語集卷一の標題について(本誌22号)